

女学校の裁縫教育について

—学校法人広島女学院の場合—

栢 崎 久美子*

(2021年11月30日 受理)

About Sewing Education in the Girls' High Schools

—In the Case of Hiroshima Jogakuin—

Kumiko NARAZAKI*

Keywords: sewing education 裁縫教育, the Girls' High Schools 女学校

1. はじめに

本報告は日本家政学会服飾史学・服飾美学部会研究会内で行われている女学校創設期における裁縫教育の実態を明らかにする研究の一端を担うものである。

筆者は2007年に広島女学院大学に奉職してから、「ファッションデザイン実習Ⅱ」という科目で洋裁の基礎を教えている。また、この科目の前に履修することが望ましいとされる「ファッションデザイン実習Ⅰ」では和裁の基礎が取り上げられ、広島県内でも珍しい、和裁・洋裁両方を学ぶことができるカリキュラムを持っている。これらの背景には家庭科教員養成という目的もあるが、教員を目指さない学生も履修することもあり、小・中・高で被服実習をあまりしたことがない学生も作品が完成した際には大きな達成感を得られる科目となっている。

ではこの裁縫教育は創設期にはどのような位置づけであったのか、またどのような変遷をたどったのか、本学所蔵の資料をもとにまとめていく。

2. 広島女学院の裁縫教育の変遷

本校については拙稿「女学校創設期の服飾資料について—学校法人広島女学院の場合—」(2018)^{注1)}にまとめており、その際に資料とした『広島女学院百年史』(1991)^{注2)}にも様々な資料とともに丁寧なまとめである。また2021年3月には『広島女学院130年史』^{注3)}も公開され、本学の歴史をつぶさに読み取ることができる。ただし、本論のテーマである「裁縫教育」という点においては資料が

分散していることから、それらの文言を抜粋してまとめると以下ようになる。

まず、広島女学院の創始ともいえる1886(明治19)年に設立した「女学会」は創立者砂本貞吉によりJ・W・ランバスとともに修身・読書・英語の三科を教授するものである。ここに裁縫教育の文字はない。これはそもそも砂本がこの女学会設立の目的をキリスト教の教えにより母親を救うためとしているからである。しかし、『創立五拾週年記念誌』^{注4)}には

「授業と云っても始めからしつかりした規則がある筈はない。始めは先に述べた様に英語の初歩と聖書を教へたのに過ぎないが、その中に國漢も數學も入れたり編物の教授も一週一、二回はやつたものです。(中略)そのころの女學生は勿論普通の身なりで、袴も着なければ洋服も着てゐない。面白い大きな髪を結って勿論、帯姿でした。」^{注5)}

と砂本の談話が記されている。明治期の女性と編物の関係についてはこれまでにいくつかの研究がなされており、森、櫻井による「近代日本における編物の変遷の一側面—明治後期から昭和前期の編物書24点の分析を通して—」^{注6)}によると全国的に1880年～1890年代に編物が流行しており、女子中等教育の中でも注目されていることから、当時の女学生としても需要のあった学びであったと考えられる。

そして、1887(明治20)年2月には「私立英和女学校」という名称を持った女学校として開業し、4月から英学・和学を教える学校として広告を出している。英学は

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授

英語や英語文学、和学は国学とも言い、日本古来の文学や歴史、有職、制度などを学ぶことである。ここにも裁縫教育の文字はない。『学制百年史』^{注7)}によると、当時の女学校としては私学の女学校が先陣を切って創立されており、特にキリスト教主義の女学校が多く設立されていることがわかっている。1870(明治3)年から1880(明治13)年ごろまで、東京では桜井女学校、立教女学校、英和女学校などが創立され、地方都市においても、横浜のフェリス女学院、ミッションホーム、ブリデン女学校、長崎の梅香崎女学校、活水女学校、大阪の照暗女学校、梅花女学校、京都の同志社女学校などが創立されていることが『学制百年史』に明記されている。『広島女学院百年史』には1887(明治20)年に出した新聞広告には、梅花女学校を卒業した杉江田鶴を教師として採用したことが掲載されており、杉江によって私立英和女学校による女子教育の礎が築かれたと考えられる。また、この年、私立広島英学校附属女生徒教場とも合流し、女生徒が移籍したとの記録があり、附属女生徒教場では修身・読物・作文・数学・歴史・理学・図画・裁縫・家政・礼節・音楽の12学科を教えていたとされている。これらの学びとある程度同様のものを有していないと合流は難しいだろうことから、おそらく私立英和女学校でも、限られた文字数の新聞広告では英学と和学という端的な言葉で表現をされていた学科であるが、実際には裁縫教育も含めた学科が備えられていたのではないかと考えられる。

なお、同年10月23日付の新聞記事で

「教師招聘 細工町英和女学校には今度米国婦人ゲーンズ女教師を聘し英語学及び洋服裁縫を享受するよしなり」^{注8)}

という文言が見られ、ここで裁縫教育が行われることがはっきりと確認できる。N. B ゲーンズが私立英和女学校に来ることは広島女学院の歴史上もっとも重要な出来事であるが、裁縫教育という観点で見ても、外国人教師が学校に就任することで洋服裁縫が始まるという重要な出来事であったと考えられる。

ただ、ゲーンズが就任することにより、私立英和女学校は宗教学校であるという認識を当時の教育関係の市民たちに与えてしまい、それまで支援してくれていた公的機関が新たな女学校を設立する契機となり、杉江もその学校の教員として引き抜かれるという教育的危機を迎えることとなった。しかし、私立英和女学校としてはゲーンズの就任は待ち望んだことであり、先の新聞記事とほぼ同じタイミングで、次のような広告を出している。

「教師招聘の広告 本校義今般米国婦人ゲーンズ女史を招聘し以来英語及洋服裁縫を教授す」^{注9)}

米国婦人、英語学、洋服裁縫の三か所は大活字を使用している^{注10)}ことから、当時の学びとして特別なことであるという印象を受ける。実際ゲーンズは広島に来て後、裁縫と英語のクラスを作ったと『広島女学院百年史』に記述されている。その後、同年11月26日付の「芸備日報」には

「米国女教師を聘してより日増に生徒の増加せしを以て・・・」^{注11)}

との記事が掲載され、その教育が受容され、また好評である様子が見て取れる。また、1888(明治21)年1月にも外国人教師を加え、漢学科だけでなく、編物、洋服裁縫、西洋料理等の教科を加えていること^{注12)}、1890(明治23)年^{注13)}、1893(明治26)年^{注14)}にも外国人教師が就任したことなどが話題として『芸備日日新聞』に取り上げられていることは洋服の裁縫教育がいかに物珍しいものであったかを示唆する興味深い記事である。

その後の英和女学校の裁縫教育については以下の内容が確認できた。1929(昭和4)年11月に文部省に求められ提出した「創立以来学則変更ノ要領」という資料によると^{注15)}、1889(明治22)年には本科2年、普通科2年で修身、国語漢文、英語、数学、地理、歴史、博物、物理、化学、家政、習字、図画、音楽、裁縫、編物、体操の16学科、専修科は修業年限を定めず、国語、漢文、英語、数学、音楽の5科目を任意に学ぶというカリキュラムであった(表1)。これらの科目は1886(明治19)年に制定された「中学校令」に酷似しており、相違点は英和女学校に第二外国語がないことと、家政、裁縫、編物な

表1 私立英和女学校の学び(1889(明治22)年)

本科及び普通科 (2年及び4年)	修身
	国語漢文
	英語
	数学
	地理
	歴史
	博物
	物理
	科学
	家政
	習字
	図画
	音楽
	裁縫
	編物
	体操
専修科 (修業年限なし)	国語漢文
	漢文
	英語
	数学
	音楽

ど女子特有な科目が加えられていること^{注16)}が指摘されている。他の女学校のカリキュラムとの比較は今回行っていないが、先行研究から独自性があるとは思えない。

その後1889（明治22）年、一時休校を余儀なくされるが、1890（明治23）年に場所を移動して再開し、その際校則を改正し、普通科のほか、高等科・予備科を新設している。ここでの学びは米国女教師3名、日本人教師数名で女子実用の学科を懇切丁寧に享受することが学生募集広告で明記されている^{注17)}。広告には裁縫教育の文字はないが、前述の「創立以来の学則変更ノ要領」によると予備科は2年で倫理、読書、英語、訳読、美術、習字、地理、図画、手芸、音楽、体操の11学科を、普通科は4年で倫理、和文、漢文、英語、訳読、数学、地理、歴史、理科、習字、図画、家政、手芸、音楽、割烹、体操の16学科を、高等科は2年で倫理、和文、漢文、英語、訳読、数学、博物、画学、家政、手芸、音楽、教育学、割烹、体操の14学科を学ぶこととなり^{注18)}、専修科は英語、音楽、手芸、女礼の4学科に限って学ぶことができるとしている（表2）。

ここで注目すべきは裁縫、編物という学科が消え、「手芸」という言葉が入っていることである。1891（明治24）年10月15日に女学校校舎が火事に遭い、それについて報じた新聞記事に「裁縫用教室」との文字が見られる^{注19)}ことから、「裁縫」という学科はなくとも裁縫教育が行われていたことがわかるが、学科として名称が変更された理由については明らかではない。

その後、1895（明治28）年の「高等女学校規定」が制定されるとそれに応じるかのように1896（明治29）年、校名を「私立広島女学校」に変更し、学科名も「手芸」は削除され「裁縫」という科目が復活し、また同年「裁縫専修科」が設立している（表3）。ここで改めて以前「裁縫」ではなく「手芸」と表記していた理由を検討したところ、次のことが言える。前述した「高等女学校規定」には「裁縫」という学科が「運針法縫方経方繕方ヲ授ク」こととあり、「手藝」は「土地ノ情況ニヨリ女子ニ適切ナル手藝ヲ授ク」こととあることから、本学は当初においては和裁ではなく、洋服裁縫や編物を教えていたため、「裁縫」という学科名を校則改正の際用いなかったのではないかと考える。そして、1896（明治29）年の改正においては和裁教育に変更した可能性も考えられる。

さて先にも述べた通り、「私立広島女学校」は裁縫を専門に学ぶために新たな専修科を設置している。残念なことにこの裁縫専修科の開設当時の学科については不明であるが、その5年後の1901（明治34）年に裁縫専修科本科2年と高等科1年が1つの科として技芸専修科（修業

表2 私立英和女学校の学び（1890（明治23）年）

予備科（2年）	倫理
	読書
	英語
	訳読
	美術
	習字
	地理
	図画
	手芸
	音楽
	体操
普通科（4年）	倫理
	和文
	漢文
	英語
	訳読
	数学
	地理
	歴史
	理科
	習字
	図画
	家政
	手芸
	音楽
割烹	
体操	
高等科（2年）	倫理
	和文
	漢文
	英語
	訳読
	数学
	博物
	画学
	家政
	手芸
	音楽
	教育学
	割烹
	体操
専修科 （修業年限なし）	英語
	音楽
	手芸
	女礼

年限3年）として名称変更し、その際の学科には裁縫と刺繍が含まれている（表4）。時間数は定かではないが、1912（明治45）年の『私立広島女学校要覧』^{注20)}によると

「技芸専修科の学科目は修身裁縫手芸国語算術家事図画音楽及体操でありまして就中裁縫手芸の教授時数は総時数の半数以上を占めて居ますかくして裁縫編物刺繍等に習熟せしむると共に三年生には割烹を兼修させまして他日一家の主婦たるに遺憾なからしめんことを期して居ます」^{注21)}

と示され、その学びの充実さが確認できる。

ここで興味深いのは『広島女学院五拾週年記念誌』には「思ひ出話」というテーマの中に掲載された丹下千歳（図1）という教員に記念誌編集員が尋ね聞いた話をまとめた「三十數年女學校に在職中の思ひ出のくさぐさ」の記述である。

表3 私立広島女学校の学び（1896（明治29）年）

予備科（3年）	倫理
	国文
	英語
	美術
	習字
	地理
	図画
	裁縫
	音楽
	体操
	歴史
	理科
	本科（3年）
和文	
漢文	
英語	
数学	
地理	
歴史	
理科	
習字	
図画	
家政	
裁縫	
音楽	
体操	
高等科（2年）教育科	倫理
	国文
	漢文
	教育
	数学
	心理
	科学
	簿記
	体操
	裁縫
	高等科（2年）文科
国文	
漢文	
英語	
教育	
心理	
家政	
裁縫	
高等科（2年）理科	倫理
	数学
	心理
	科学
	家政
撰科（修業年限なし）	英語
	音楽
裁縫専修科本科（2年）	学科不明
裁縫専修科高等科（1年）	学科不明

表4 私立広島女学校技芸専修科の学び（1901（明治34）年）

技芸専修科（3年）	倫理
	裁縫
	刺繍
	国語
	美術
	家事
	習字
	図画
	音楽
	体操



図1 丹下千歳

「日清戦役の頃でしたか、學校（横濱共立女子職業學校）を出て間もなく、私は廣島に来て、廣島女學校へも一週一、二回刺繍を教へに来ました。（後、三十四年より専任教師となる）始めは裁縫科の生徒だけに教へたものですが、後には普通科（後の本科）にも授業の間に教へたものです。之が廣島では刺繍教授の最初のことでした。（中略）

日清戦役の終つた時でしたか、二月から刺繍を教へ始めたのに、卒業式にはぜひ何か陳列して貰ひたいとの事で、大急ぎで製作させ一今から考へれば誠にお恥づかしい様な粗末な物でしたが、額掛けか何かを刺繍して卒業展覽に出した事もありました。然し、その時分では廣島随一なので、大變お客様方の興味を引いて感心されたものでした。それ以来ずっと、裁縫専修科の廃止になる迄、毎年卒業陳列には刺繍はなくてはならないものとなりました。」^{注22)}

日清戦役のころつまり1894（明治27）年に初めて広島で刺繍教育がされたという貴重な記録である。私立英和女学校時代には裁縫科はまだなく、文脈から考えると専修科の「手芸」の時間に刺繍を教授しており、授業の間、つまり時間外にも普通科の生徒に刺繍教育をしていたと読み取れる。また、1895（明治28）年以降、卒業陳列では刺繍作品を展示したこと、裁縫専修科が廃止になるまで続いたという内容は冒頭の三十数年のくさぐさというタイトルから、後述する1923（大正12）年の技芸専修科の廃止に当たるとされ、在職中丹下千歳が刺繍教育を一身に担い展開していたといえるだろう。

その後、『広島女学院130年史』によると1911（明治44）年に技芸専修科卒業生に対し「裁縫手芸」の文部省「教員検定受験資格」の認可が下りており、要覧にこそ一家の主婦との文言はあるものの、裁縫教育の担い手として社会で活躍することもできるという可能性を含んでいることも今日の広島女学院に通じる教育姿勢であるように感じられる。

そして、その5年後、1916（大正5）年、技芸専修科

表5 私立広島女学校実科の学び（1916（大正5）年）

実科（3年）	修身
	国語
	歴史
	地理
	美術
	理科
	家事
	裁縫
	手芸
	図画
	音楽
	体操
	聖書（課外）

は実科へと改称する。これについては、『広島女学院百年史』によると、当時の社会情勢に応え、「良妻賢母の実質的担い手を育成する」目的で、「文指校則」の改正を受け設立した^{注23)}とあり、表5のような学科を学ぶこととしている。

さらに1922（大正11）年、実科は本科と合わせて高等女学部と改称し、その1年後高等女学部実科のみ廃止され、裁縫教育を中心とした教育体制はひとまず区切りがついたといえる。

なお、紙面の都合上すべての科の教科を提示することができなかったが、裁縫専修科、技芸専修科、実科以外の科でも「裁縫」は基本的に学科に組み込まれていることが確認できたが、時代によって英語教育を重視するために高学年になると「裁縫」のみが「英語」を学ばない場合の選択科目になったり、保姆師範科にはなかったりなど他学科と比較して、広島女学校においては重要視されていない学科であることが確認でき、この点についても全国の傾向と比較した時の位置づけとしての検討を今後続けたい。

3. そのほかの資料から

今回の調査にあたり、歴史資料館に資料の確認を行ったところ、以下のものが確認できた。

まず、1903（明治36）年に裁縫専修科を卒業した学生の作品である（図2）。こちらはちりめん細工の守り袋と呼ばれるもので、デザインは蓑亀である。日本玩具博物館によると

「明治時代に入ると、ちりめん細工は女学生の教材として取り上げられ、女学生達は、『女学裁縫教授書（明治27年）』『裁縫おさいくもの（明治42年）』『続裁縫おさいくもの（明治45年）』などを教科書として、意匠をこらした作品づくりを競い合いました。」^{注24)}



図2 裁縫専修科生徒作品

とあり、同館には類似の作品も寄贈されていたことから、当時定番ともいえる作品であったことがうかがえる。

また、年代は下るが歴史資料館に展示されている写真資料がある（図3）。こちらは1923（大正12）年のもので、タイトルには家事実習とあるが、英語では「Embroidery Class」とあり、刺繍の授業であることがわかる。日本刺繍に特徴的な刺繍台に布地を張り、16名ほどの生徒が取り組んでいる。1923（大正12）年には前述の通り、実科はなくなり、高等女学部には「裁縫」の授業はあるが、学科名に「刺繍」は含まれていない。タイトルの通り、「家事」の中の実習の一コマなのか、あるいは、この写真が卒業アルバムからの抜粋のため、まだ実科で「手芸」が行われていたところに撮影したものが含まれているのか、この点については明らかではない。

また、さらに年代は下るが、『広島女学校第35回卒業記念帖』（1928）には裁縫室で和裁を行っている様子が見られる（図4）。この時期も学科として「裁縫」はあり、全国的な女学校の裁縫教育と同様のものを進めているであろうことが見て取れる。



図3 家事実習の様子



図4 裁縫実習の様子

4. まとめ

本論は広島女学院の周年史の記述を中心に大正期までの裁縫教育についてまとめていった。裁縫専修科、技芸専修科という裁縫教育を中心的に行っていたであろう学科があったにもかかわらず、明らかになっていない部分が多くあり、同時に、原爆の被害による資料不足の点が改めて課題となった。しかし、広島女学院の裁縫教育は洋服裁縫から始まったこと、また広島で刺繍を教えたのが初めての場所であるかもしれない可能性について指摘できたことは興味深いことであった。

今後は裁縫専修科、技芸専修科の実態についてのさらなる資料探しと、卒業アルバムなどの画像資料の調査と昭和期を含めた裁縫教育の変遷を引き続きまとめ、さらには全国の公立私立の女学校との比較をしていくことで広島女学院の裁縫教育の特徴について明らかにしていきたい。

注

- 1) 榑崎久美子、『広島女学院大学人間生活学部紀要』, 5号, 2018年, pp. 81-86
- 2) 広島女学院百年史編集委員会、『広島女学院百年史』, 広島女学院, 1991年
- 3) 広島女学院130年史編集委員会、『広島女学院130年史(1886-2016)』, edu.career-tasujp/p/dig, 2021年

- 4) 『創立五拾週年記念誌』, 広島女学院, 1936年
- 5) 注4, p. 33
- 6) 森理恵, 櫻井あゆみ, 『日本家政学会日本家政学会誌』, 63(5), 一般社団法人日本家政学会, 2012年, pp. 225-236
- 7) 国立国会図書館デジタルコレクション, 『法令全書』, <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787996/272>, 2022年1月5日最終閲覧
- 8) 注2, p. 576
- 9) 注2, p. 27
- 10) 注9と同じ
- 11) 注9と同じ
- 12) 注8と同じ
- 13) 注2, p. 577
- 14) 注2, p. 45
- 15) 注2, pp. 638-650
- 16) 注2, p. 40
- 17) 注2, p. 577
- 18) ただし普通科高等科の割烹は随意科としている。
- 19) 注2, p. 36
- 20) 注2, pp. 629-634
- 21) 注2, p. 633
- 22) 注4, pp. 150-151
- 23) 注2, p. 106
- 24) 日本玩具博物館, 『ちりめん細工 ちりめん細工とは』, <https://chirimenzaiku.org/about/>, 2022年1月7日最終閲覧

図・表出典一覧

- 図1 丹下千歳 『広島女学校第35回卒業記念帖』, 広島女学院高等女學部, 1928年
- 図2 裁縫専修科生徒の作品 2022年1月7日 歴史資料館にて著者撮影
- 図3 家事実習の様子 図2と同じ
- 図4 裁縫実習の様子 図2と同じ
- 表1～表5 『広島女学院百年史』掲載資料編「資料二-七 創立以来学則変更ノ要領」をもとに著者作成